
共同研究の経過と概要

篠原 徹

1 目的

日本列島に展開した人間の歴史は、長期的環境の変化、短期的災害と開発、環境の保全と破壊、人の移動と定住の繰り返しであった。将来の人間生活とその環境のありかたを探るためには、歴史のなかで人々が実践してきたことを多様な側面から分析し、理念を構築することが必要であろう。

本研究は、文化をもつ社会集団と環境との相互作用の研究を通じて、日本列島に通時的に展開した人間の歴史を、「資源としての自然と人間の関係」および「脅威としての自然と人間の関係」の2つの側面から明らかにする。

第Ⅰ期のA班は日本人の労働観と自然観の特徴を抽出、B班は列島の内陸部の一地方社会における災害と開発の形態を解明する。これらの成果を踏まえて、第Ⅱ期においては、

- ・ A班は工業・農耕・漁労・狩猟などの人と自然の生態史的・社会経済史的関係を、日本列島を含むアジア地域のなかで、環境に関する民族的プラクシスから追究し、それぞれの地域固有の歴史や現在のなかにある論理や実践を見いだすことを目指す。
- ・ B班は日本列島内の自然環境の変化と人々の対応、さらに人の作り出す二次的な環境から派生する資源問題、人口問題そして都市における火災・疫病・廃棄物などの開発に伴うさまざまな環境問題に迫る。

日本列島内における人と環境の相互作用を人類史という視点からみると、日本の近代ほど我々の住むべき環境を大きく変容させた時代はないであろう。これは単に自然環境の大きな変化にとどまらず、社会環境や文化環境にも多大な影響を及ぼしてきた。今や個別具体的な自然保護や環境保全というレベルで問題を解決できるものではない。環境―人間系の多様なありかたを総合的に分析する必要がある。列島内の人の歴史は、環境の開発と災害、環境の保全と破壊、生物（人を含めて）の移動と定住の繰り返しであった。未来の人間の自然環境のありかたを探るためには、歴史のなかの人びとの実践を分析し、問題群を整理し理念を再編成することが不可欠であろう。第Ⅰ期における成果を踏まえ、環境と人の関係を、①マイナー・サブシステム、②持続的発展、③経済とモラル、④資源・占有・利用という各4点に焦点を合わせ、第Ⅱ期の共同研究を進めたい。Ⅱ期においては地域的対象を日本列島を含む東アジア・東南アジアに広げ、歴史的なあるいは現在の人びとの環境に関する民族的プラクシスを追究する。それぞれ地域固有な歴史や現在のなかにある論理や実践をみいだすことによって、アジア地域の近未来的な環境と人のありうべき関係を展望する。

2 共同研究員（*は研究代表者）

- 井上 真 東京大学農学部
内山 節 学識経験者
岡 恵介 アレン国際短期大学
小椋 純一 京都精華大学人文学部
菊池 勇夫 宮城学院女子大学
鬼頭 秀一 東京農工大学農学部
小林 茂 大阪大学文学部
菅 豊 東京大学東洋文化研究所
関 礼子 帯広畜産大学
竹内 潔 富山大学人文学部
竹川 大介 北九州大学文学部
新田 栄治 鹿児島大学文学部
野地 恒有 愛知教育大学教育学部
松井 健 東京大学東洋文化研究所
水口 憲哉 東京水産大学水産学部
宮内 泰介 北海道大学文学部
安室 知 本館民俗研究部
西谷 大 本館考古研究部
*篠原 徹 本館民俗研究部
[ゲスト・スピーカー]
卯田 宗平 総合研究大学院大学（院生）
梅崎 昌裕 東京医科歯科大学
吉村 郊子 本館歴史研究部
菱川 晶子 国学院大学大学院（院生）
大泉 摩耶 東京農工大学大学院（院生）

3 経過

[1998年度]

第1回研究会 1998年6月20・21日 国立歴史民俗博物館

全 員 第Ⅱ期研究会の目的と打ち合わせ

篠原 徹 「反自然を生きる人びと——エチオピア・コンソの農耕と家畜——」

菅 豊 「農民がつくったヒツジ——中国・漢人の自然支配の意欲について——」

第2回研究会 1998年9月4日 東京大学東洋文化研究所・東京大学総合研究博物館見学

1998年9月5・6日 国立歴史民俗博物館

宮内泰介 「重層的な環境利用と共同利用権——ソロモン諸島マライタ島の事例から——」

関 礼子 「自然保護の行為と価値——織田が浜埋立反対運動を支えた〈故郷喪失者〉たち——」
鬼頭秀一 「多元的な環境倫理なのか、普遍的な環境倫理なのか——リオ以降の環境倫理思想の
行方——」

全員討論

第3回研究会 1998年12月19・20日 国立歴史民俗博物館

岡 恵介 「北上山地山村における生存の技術としての野生植物の救荒利用と焼畑耕作」
小椋純一 「明治前期における関東地方の植生景観——迅速図・偵察録にみる植生と人為との相
関——」

菊池勇夫 「近代日本の飢饉現象を環境とのかかわりでどのように理解するか」

全員討論

[1999年度]

第1回研究会 1999年5月8・9日 国立歴史民俗博物館

新田栄治 「東北タイの発展と衰退——先史産業と環境適応——」
井上 真 「コモンズ論へのアプローチ——焼畑と共有林，地域研究，地域発展論——」
大泉摩耶 「シマの人と自然のつながりの過去と現在」

第2回研究会 1999年9月18・19日 国立歴史民俗博物館

水口憲哉 「漁村における資源維持の論理——環境・資源・市場に漁村共同体はどうかかわる
か——」

竹川大介 「点地図と面地図，海の民の認知地図——ソロモン諸島マライタ島の事例から——」

卯田宗平 「船上からの景観の景観認識に関する基礎的研究——『山アテ』行為の事例分析——」

第3回研究会 1999年12月18・19日 国立歴史民俗博物館

野地恒有 「篠島のナマコ漁について」
菱川晶子 「図像化された動物——狼の形態認識——」

[2002年度]

第1回研究会 2000年12月16・17日 国立歴史民俗博物館

卯田宗平 「共振する新・旧の漁業技術」
吉村郊子 「炭焼きと薪炭林——薪炭林の伐採方法選択にかかわるさまざまな要因——」
梅崎昌裕 「パプアニューギニア高地におけるブタ飼養の現在の意味」

第2回・3回合同研究会 2001年3月9～12日 群馬県多野郡上野村ヴィラ・セセラギ

篠原 徹 「第Ⅱ期共同研究の総括と反省」
卯田宗平 「〈両テンビン〉にみる生業システム——房総半島—海付き村における生業維持方
法——」
安室 知 「コイに年齢と名前を授けること——水田養鯉地におけるコイの成長段階名——」

全員討論 今後の環境論の展望

現地見学会 上野村樽沢の生業と自然

4 概要

基幹共同研究第Ⅱ期「日本歴史における環境と人間生活に関する総合研究」A班「アジア地域における環境とその民族的プラクシス」は3年間にわたり、主として個別発表と協同討議の形態をとりながら共同研究を実施してきた。この研究は基幹共同研究第Ⅰ期「日本歴史における環境と人間生活に関する総合研究」A班「日本歴史における労働と自然」という共同研究を発展継承させたものである。

この発展継承の意味するところは、次の2点を指している。第Ⅰ期では主として日本列島内での自然を資源として利用してきたさまざまな生業とその労働慣行をとりあげてきた。第Ⅱ期では、これを広くアジア地域に拡大し、東南アジアやメラネシア、あるいは中国といった地域で研究する研究者に参加してもらい、日本の民俗的な労働慣行や土地所有のありかたを、アジアの自然と民俗の多様性のなかで検討する作業をおこなった。具体的には、タイ・インドネシア・ソロモン・中国などにおける研究であり、あわせて現在日本のなかで環境問題の問題視されている地域での研究もとりあげた。

2点目は、第Ⅰ期では十分検討できなかった山野河海の所有権、利用権、占有権の各地域での多様性を知ることができた。こうしたことを基盤にして各地域の自然資源の減少や枯渇に対してどのようなリスク回避のシステムが存在するのか、あるいは住民のなかでどのような合意形成のシステムをもっているのかが議論された。とくに山の資源である共有林と海の資源である漁場をめぐる「コモنزの悲劇」の理論の妥当性には多くの異論が提出された。

第Ⅱ期の初年度である1998年度の研究会は、第Ⅰ期の3年間の成果を踏まえてさらに発展させる目的をもっている。ひとつには日本列島内での事例の検討にとどまっていた地域を拡大することであったが、中国の漢民族が住む集約性の高い長江流域の農耕地帯における家畜のありようや、オセアニア地域のソロモン諸島での環境利用と共同利用権の報告などの知見を得ることができた。

また、近世期の東北における飢饉のときの環境利用や明治期の関東地方における植生が、現在のそれらとは相当異なったものである報告も受けた。イノシシやオオカミの分布が、当時の生業活動と気候と密接な関係をもっていて、歴史的に変化することが明確になった。明治初期における植生も当時の生活様式つまり燃料として薪を使うことなどによって想像以上に現在とは異なったものであり、植生も人為とのかかわりで大きく変化することがわかった。

資源としての自然の利用に関して、「経済とモラル」もこの第Ⅱ期の大きな課題のひとつであるが、これについても具体的な織田が浜の事例と、リオ・デ・ジャネイロ地球サミット以降の環境思想の流れの報告を受けた。今期に掲げた諸問題はいずれも相互に深く関連していて、一種の複雑系の問題であることがあきらかになった。

1998年度および1999年度では「資源・占有・利用からみた環境」を主題として研究会を開催してきた。1998年の研究では松井健の提唱するマイナー・サブシステムの概念の精緻化がはかられたが、1999年度はこの概念の有効性について、とくにエコ・コモنز論との関係で議論がおこなわれてきた。各地域の資源を有する土地や海の所有や使用についての慣行とその変容をめぐってさまざまな事例が報告され、今後アジア的な所有観について新たな視点を提供できる見通しがつい

できた。

アジア地域における自然資源利用の慣行について知見をうることができたのは、タイ・インドネシア・ソロモン諸島などの事例であり、同時に日本の沖縄、琵琶湖の事例と比較することができた。アジア的な同質性、同時にまたアジア内での異質性がより明確になった。

この研究では日本の近世から近代への移行期に着目して、資源としての自然の利用の変化を歴史的に把握することも大きな目的としていた。これは第Ⅰ期から継続した課題であった。これについては関東地方の植生に着目した環境の変化や落葉広葉樹林帯である北上山地の生業からみたこの100年の人間活動の生態史をあきらかにすることができ、大きな成果といえる。また南西諸島の奄美大島における人と自然の関係史を知ることができ、異なった環境における生業の変遷を理解することができた。

各地域の自然にかかわるさまざまな生業には、それを可能にする人びとの精緻な環境認識や景観認識というエノス・サイエンスが存在する。とくに漁業における海上での漁場を認識する「山アテ」行為や「認知地図」の詳しい研究が発表され、いままでの動物や植物などの生物にかかわる民族分類だけにとどまらず、認識人類学の新たな分野が開拓された。

この共同研究では各地域の個別のモノグラフ的な研究と環境問題の今日的な理論の研究を同時に進行させ、理論と具体が乖離しないように努めてきた。個別の研究が多岐にわたったことと、環境問題の理論自身が主張する人の価値観によって異なることで、かならずしも整合的にはならなかった。その点は、今後展開する第Ⅲ期の研究に期待しなければならない。